

消 息

小澤悦夫先生のご退職にあたって

小澤悦夫先生は、2021年3月をもって早稲田大学商学部をご退職になられます。本来ならば、おめでたいこと、慶賀に堪えないことであることは、分かり切っているのですが、なんとも言えない寂しさを覚えています。それは、特に私たち英語担当の教員にとって、小澤先生がいつもそこにいらっしゃることが、長年にわたっての日常だったからだと思います。教員皆が関わる校務、学部運営委員会、教授会はもちろん、我々英語担当教員内の諸会議や懇親の会、いえ、ちょっとした研究室の廊下や教員室での立ち話においででさえ、私たちは、そこに小澤先生がいらっしゃることが当たり前だと思ってきましたし、現にそうでした。そして、何か困ったことがあると、小澤先生にアドバイスを求めたものでした。それが、来年度からは適わなくなるのですから、寂しく思う、もっと言えば、心細く思うのは当然のことです。

小澤先生の長年の研究対象は、英語文法です。それも、後に示す主要業績でお分かりのように、実に広範にわたっています。言語を説明する時（この場合文法）、いくつかの範疇に分けて説明することが普通です。英語の副詞にはどのような特徴があるか、主語はどうか、最上級で表されるものは何か、などなど。しかし、そうした範疇は、言語の中に独立して存在するのではなく、全てが関わり合っていて、広い視野を持った文法の記述こそがよりよくある言語の文（章）を作り出す仕組みに迫ることができる。そう考えると、先生のご研究の幅の広さは、常に英文法の全体を視野に入れ、その姿を浮き彫りにされて来られたのだと思います。

当然のことながら、小澤先生は、ご研究の成果を英語教育、学生の英語力向上につなげるためのご研究にも使われました。長年の小澤先生との付き合いの中で、ゆるぎない言語観・文法観に基づいた英語教育のありかた、また学生が学ぶべきことについての信念と言っても良いお考えを伺い、何度も自らの非学を恥じたものです。私がそう思わざるを得なかったのは、先生のご研究が特に現代のジャーナリズムの文章や政治家の発

言など、それらの評価のために高い言語力を要する資料を使われていたためであろう、と考えたものです。だいぶ後になって、先生が英詩にも大いに興味を持たれ、研究されていたことを知り、今はそれが確信に変わっています。

小澤先生がこのように英語を深く学ぼうと志されたのは、おそらく、名門諏訪青陵高校ご在学中ではなかったかと思われます。と言うのも、当時は、所謂大学紛争の渦中。東京大学、東京教育大学が入試を中止し、浪人する学生も多く出ました。そんな中、先生は、高校ご卒業と同時に（迷わず）東京外国語大学英米語学科に入学されているからです。外語大で、先生は、文学よりも英語学に興味を持たれ、松田徳一郎先生から文法論を、竹林滋先生から音声学を学ばれています。卒業後、東京大学大学院に進まれ、そこでは、長谷川欣佑先生から変形生成文法、池上嘉彦先生、国広哲弥先生から言語学、金田一春彦先生、南不二男先生から国語学を学ばれています。何とも羨ましい限りです。先生は、博士課程の2年目に鶴見大学文学部英文学科に専任講師として招かれました。その後1986年に、早稲田大学商学部へ赴任され、現在私たちが知る小澤悦夫先生となられたわけです。

早稲田に移られてからも、1991年と2002年の2度にわたり、Harvard-Yenching InstituteでVisiting Scholarとして研究されました。小澤先生は、長谷川先生譲りの「言語事実を大切に、それをできるだけ一般的に説明できる分析をする」という研究アプローチを常にとられ、実際にお読みになられ吟味された様々な英文資料から、先に述べたような統一的な英語、英文法研究を進められました。その成果の多くが、『英語学試論集』（私家版）にまとめられています。比較的近年には、幕末の蘭通詞にも興味を持たれています。

先生のご趣味の話をちょっとさせて頂きましょう。まず、思い浮かぶのは、将棋のことです。ソシユールが、『一般言語学講義』の中で、チェスを例に使ったことは有名ですが、その点でも将棋は、文法を研究対象にされている緻密な先生ならではのご趣味とと思っています。一時は、上野や新宿の将棋クラブにも通われたほどの打ち込みようで、その腕前も察せられます。やや柔らかいご趣味には、歌舞伎、寄席での演芸鑑賞があります。先生の何とも言えない語り口は、そんなご趣味からくるのかも知れません。実は、私は時折、先生とカラオケをご一緒しました。初めてご一緒した時に、先生が字幕を見ることもなく、三波春夫のヒット・バラード「俵星玄蕃」を一気に謡い上げられたのに

驚愕した覚えがあります。小澤先生は、他にも学生運動時代からのフォークの多くもレパートリーとされていました。今回「消息」を書かせて頂くことになり、新たに知った先生のご趣味があります。それが、クラシックギターと写真です。そういえば、先生の研究室は、何葉かの写真が飾られていました。でも、ギターを高校時代から続けてこられたことは、全く知りませんでした。一度お聞かせ願いたい、と思っています。

この「消息」に是非とも書かせて頂きたかったことが、もうひとつあります。それは、先生の愛犬、コロスケくんのことです。先生は、折に触れた雑談の中で、愛犬コロスケくんとの「交流」の話をされました。先生が、コロスケくんが亡くなったとお話をされた時には、先生に心から慈しまれたコロスケくんの姿が私の臉にも浮かんだものです。

このように、学識、慈しみ深い先生がご退職されると、先生が私たち英語担当教員の中で果たされていた数々の役割を、私たちが分担して担っていかねばなりません。私自身はなんとも心もとないのですが、より若い先生方は、立派にその責に堪えてくれることと思います。小澤先生には、危なっかしくお見えになることでしょうか、どうぞふるさと諏訪と東京でのご生活を満喫されながら、見守ってくださればと存じます。

小澤先生、長い間、有難うございました。でも、やっぱり寂しいです。

森田 彰

主なご業績

1. 著書

2013年5月 『英語学試論集』（私家版）

2. 論文

1986年9月 * "Notes on a Linguistic Approach to English Poetry"

In Honor of Shigeru Takebayashi (Tokyo: Kenkyusha)

1987年1月 * 「英語の劣勢比較構文について」 * 『早稲田商学 第320号』

1987年6月 * 「形容詞の代用表現— look it を中心に—」 *Lexicon* No.16

1987年8月 * 「英語最上級の一用法」 『早稲田商学 第324号』

- 1989年9月 「POD⁷のD表示について」『実用英語ジャーナル 第10巻第1号』
- 1989年7月 *「例示の thus」『英語青年』Vol.135, No.4
- 1989年12月 *「国際英語と英語教育」
『吉沢典男教授追悼論文集』（吉沢典男教授追悼論文集編集委員会）
- 1990年3月 *「Unpassiveの意味再考」『早稲田商学 第337号』
- 1990年9月 「語学教育における問題点と改革の方向」
『展望 第20号』（早稲田大学教員組合）
- 1991年2月 「副詞的名詞句の性質について」『早稲田商学 第343号』
- 1993年2月 “Some Observations on the Relationship between Direct Speech and Indirect Speech”『文化論集 第2号』
- 1993年7月 * “Robert Bly’s ‘Snowfall in the Afternoon’: An Exercise in a Linguistic Analysis of Contemporary Poetry” *Lexicon* No.23
- 1993年12月 「*Maledicta* — タブー語の世界 —」『文化論集 第3号』
- 1994年4月 「外国語教育改革私論」
大坂敏明他編『大学改革—早稲田は探求する』（労働旬報社）
- 1994年9月 「児童英語教育における語学的基礎」『文化論集 第5号』
- 1995年4月 * “Pragmatic Factors and the Sequence of Tenses in English”
『長谷川欣佑教授還暦記念論文集』（研究社）
- 1996年3月 「語学教育における学生の意識と教員の対応について」
『早稲田大学教育評論 第10巻第1号』
- 1999年3月 * “Get to VP”の一用法』『文化論集 第14号』
- 2004年3月 * 「リンカーン大統領と日本」『文化論集 第24号』
- 2004年9月 * “Deleted Truth: An Exercise in a Linguistic Analysis of Political Discourse”『文化論集 第25号』
- 2006年3月 「日英語比較の一視点—日本文学を中心に—」『文化論集 第28号』
- 2007年3月 * 「言語学的メタファー分析再考」『文化論集 第30号』
- 2008年3月 * “Too Adjective to VP” 構文の二用法について』『文化論集 第32号』
- 2008年9月 * 「英語の unparticiple 構文について」『文化論集 第33号』
- 2014年3月 「雪と〈死の願望〉— “Stopping by Woods on a Snowy Evening” 再考 —」

『文化論集 第 43 号』

2019 年 9 月 「ニューヨーク・タイムズの英語」『文化論集 第 56 号』

3. 辞典類

1989 年 5 月 井上雍雄編『話題源 英語』（東京法令出版）

「bad/wrong」・「envy/friendly」の項目執筆

1998 年 7 月 小田稔他編『理化学英和事典』（研究社） 発音校閲

2010 年 3 月 宇賀治正朋編『英語学文献解題 第 4 巻 文法 I』（研究社）

Albert S. Hornby: *A Guide to Patterns and Usage in English*Ralph B. Long: *The Sentence and Its Parts*Ralph B Long & Dorothy R. Long: *The System of English Grammar*Eugene A. Nida: *A Synopsis of English Syntax*Frank R. Palmer: *The English Verb*Paul Roberts: *Understanding Grammar*James Sledd: *A Short Introduction to English Grammar*

以上の項目執筆

※商学部赴任以前発表のもの、および研究ノート、口頭発表、翻訳、書評は除いた。

※*をつけた論文は『英語学試論集』に収録したものである。